



30 瀧和亭

《孔雀鸚鵡図》

二曲一双

明治二十九年（二八九六）

絹本着色

各一七四・〇×一八二・〇

瀧和亭（一八三〇～一九〇二）は東京を中心に明治期に活躍した南画家である。江戸に生まれた和亭は、はじめ大岡雲峰について南画を学んだ。その後長崎に遊学し鉄翁祖門のもとで明清の中国画を数多く模写し、来船中であつた陳逸舟、華昆田ら清の画家とも交流した。江戸に戻ってから、和亭は実物写生に精を出す一方で、日本の古画や元時代以前の中国画まで研究し、卓越した描写技術に裏打ちされた濃麗な独自の花鳥画を展開した。また、和亭は明治宮殿の杉戸絵製作に参加した他、皇室からの御下命を受けることも多く、明治二十六年（一八九三）には帝室技芸員を拝命している。

和亭の内国勸業博覧会における業績に目を向けると、まず第一回では「松樹牡丹図」を出品して花紋賞牌を受賞し、その名を広く知らしめた。続く第二回では「著色花卉図」、第四回では「松鶴遐齡図・受天百禄図屏風」でそれぞれ妙技二等賞を受賞している。これらの画題を見ても分かる通り、和亭は特に花鳥図にその真価を発揮した。

そうした和亭の特徴がよく現れているのが、明治二十九年に昭憲皇太后の御下命で製作されたと考えられる、この《孔雀鸚鵡図》である。左隻には、雌雄の孔雀を中心に三羽の燕や木瓜の花が描かれる。右隻は奇異な形状の太湖石の上にとまる鸚鵡が描かれ、その周囲を孔雀の存在感に對抗するように、色とりどりの牡丹が取り巻いている。左隻と右隻で意図的に岩の描法を変えているように、



雅趣に富んだ筆遣いを見せようとする南宗画の要素が認められる一方で、細部にまで至る描き込みと陰影表現が施された写実的な花鳥の描写には、冷静にモチーフの姿形を写し描く北宗画の要素が読み取れる。南北合派と呼ばれた和亭の幅広い画風がよく現れた作品と言えよう。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

内国勸業博覧会 ― 明治美術の幕開け

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 57

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十四年四月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections